2025-4-2

障害者の差別や偏見をなくし、みんなが暮らしやすく働きやすい社会に

3年3組18番　齊藤ことみ
3年3組32番　橋本　侑奈

Key words:「障害」「交流」「インクルーシブ教育」「分離教育」

1.はじめに

　人はいつも互いに支え合って生きている。そのため人は悲しみや喜びを仲間と共有し合い幸せを感じることができる。この「交流」がなければ、互いを理解できず、分かち合うことができない。そんな必要不可欠な交流だが、日本は障害者と健常者を分けて行う分離教育が主流のため障害者との交流が不足している。また、高校1年生の頃、白杖を片手に点字ブロックの上を歩いている方を見て、数人の若者が指を差し軽蔑しているところを目にした。実際にそのような場面を見て、まだ差別や偏見が根強く残っていることに衝撃を受けたと同時に、その場にいたにも関わらず、何もできず無力さを感じたことも探究しようと思った理由の１つだ。このような背景から、私たちは障害者と関わっていくことに興味をもったことが探究をしようと思ったきっかけだ。このことから、障害を持った方への配慮や接し方を正しく理解し、障害者への差別をなくし、みんなが暮らしやすく働きやすい社会にしていきたいと考えた。

2.序論

　最近の世の中では障害に関する様々な議論が交わされている。その一つとして、障害の表記についてだ。平安時代から明治時代にかけて「障碍者」という表記が使用されていたが、明治時代以降の法令用語改正令によって使用が減った。その後、「障害者」が多く使われるようになった。しかし、この表記に対し賛否両論が生まれ、内閣府では2010年に『「障害」の表記に関する検討結果について』というレポートが出された。その前年に、障害者制度の集中的な改革を行うため「障がい者制度改革推進本部」が設置され、本部内で『「障害者」の表記に関する作業チーム』が発足され、調査などを経て、発表された。一般社団法人障がい者自立支援サポートによる障害表記についてのアンケートでは、42%の人が「障がい」表記がいいと答えた。しかし、生まれつき先天性四肢欠損症という障害をもった乙武洋匡さんのYouTubeによると、障害者を対象とした「障がい者という表記についてどう感じるか」アンケートでは43%の人が「いや」と答えた。この結果から、世の中の一般的な障害者に対する表記についての考えと実際の障害者自身の考えに大きな差があることがわかる。

　また、障害に関する議論の一つとして教育制度に関することもある。日本では1979年に障害児教育が公的な「特殊教育」として始まった。障害児に対する援助が進んだ面では良かったのだが、障害の有無で教育の場が分けられるきっかけとなった。今の教育では、障害のある子どもたちを特別支援の対象とし、特別支援学校や特別支援学級などを活用して、障害など特別な支援を必要とする子どもを、そうではない子どもと別環境で教育する分離教育を主軸として行ってきた。分離教育には、整備された環境で専門スタッフによる細かい配慮や指導を受けられるメリットがある一方で、少人数学級や先生とマンツーマンが主流のため障害のある子どもの人生経験や人間関係、社会経験の機会を奪ってしまう可能性が、近年問題視されている。2022年9月、国連障害者権利委員会は、日本の障害者権利条約の実施状況に対して「分離教育をやめるように」と勧告した。つまり、インクルーシブ教育を強く推奨しているということだ。インクルーシブ教育は、障害者などの多様な子供が通えるよう通常の学校を改革することであり、障害者健常者関係なく同じ教室で学ぶことができるため、社会に積極的に参加・貢献できるという大きな利点があり、友達をつくりやすく人との交流を

図りやすい。この勧告を受けて文部科学省は、インクルーシブ教育に対しての教員の専門性向上や学校施設設備の整備充実などの支援を実施することで、インクルーシブ教育システムの構築を進め、共生社会の形成に向けた動きを強めている。ただ、あらゆる多様性の中で障害の有無に焦点を置いても、日本のインクルーシブ教育は、まだまだ普及にはほど遠い現状にある。このような現状から、健常者と障害者との間に大きな壁があることがわかる。では、少しでも壁をなくし交流を増やしていくにはどうすればいいのか。

私たちは以下の調査と取り組みを行った。

(1)調査

ア、養護学校勤務経験のある養護教諭へのインタビュー

イ、にじいろクレヨン(橿原市の障害者向けサービス＆支援組織)の職員へのインタビュー

ウ、名古屋国際会議でのインタビュー

エ、障害者の作品が展示されているIsikawaみらいアート展でのインタビュー

(2)取り組み

ア、全国障害者研究会でのボランティア

イ、にじいろクレヨンへのボランティア

ウ、Isikawaみらいアート展と第51回奈良県障害者作品展の観覧

3.本論

(1)調査の結果と考察

ア、養護学校勤務経験のある養護教諭へのインタビュー

私たちが以前養護学校に勤めていらっしゃった保健室の山田先生にインタビューを行ったところ、障害者と健常者との大きな壁をなくすには、交流を増やしていくのが1番望ましいとおっしゃっていた。実際に、地元の学校との交流を行なっていたそうだ。顔見知りを増やして何かトラブルが起きた時にすぐに助けられることを目的に行なっていたそうだ。

イ、にじいろクレヨンの職員へのインタビュー結果

デイサービスの職員にこのお仕事に就いたきっかけを伺ったところ、通っていた学校がろう学校盲学校と交流校だったことが大きいとおっしゃっていた。また、支援学級の同級生と関わりいたずらを受けお母さんに相談をした時に「何か理由があるんだよ。」と言われその理由を知りたいと思ったことが今の仕事に繋がっているのだそうだ。この経験から、交流をすることはどれだけ重要なものかが分かる。交流は私たちにたくさんの知識を与えて新しい価値観や将来の職業までも繋がることになる。幼い頃からの経験は、将来を作っていく大きな基盤となることが分かった。現在問題となっている障害者への差別が生まれてしまうのは、固定概念があるからだ。人と会話をし共有し合うことは、人と人との壁を自然となくし、固定概念も生まれない。そのため交流を増やしていくことはとても大切である。

ウ、名古屋国際会議でのインタビュー

私達は今の現状を知るために株式会社デンソー、株式会社ロフトワーク、トヨタ自動車株式会社の3つの企業に障害者の雇用についてお話を伺った。すべての会社が障害者を雇用していて、障害者に対する合理的配慮もされている。株式会社ロフトワークでは、障害者雇用については、押し付けはせず重荷にならないように、固定概念をなくすことが大事だそうだ。様々な場でコミュニケーションをとる上で障害者同士のいざこざがあったり大変なことは多いが、慣れていくことが大切であり、状況や環境を把握しサポートしていくことが大切だとおっしゃっていた。また、カンボジアで支援活動をされている株式会社NATURAL VALUEにフリースクールについてお話を伺った。希望者がいた場合特別なクラスを作ることはできるが、基本的にはカンボジアでは同じ学級で学ぶことが多いそうだ。クラスを分けてしまうと、コミュニケーションを取る機会がなくなってしまう。学力の差があるからこ

そ、学んでいく中でお互いに教え合うことでコミュニケーションを取ることができるそうだ。

エ、障害者の作品が展示されているIshikawaみらいアート展へのインタビュー
アート展を通して閲覧した方に伝えたい事は、障害者というフィルターを通して作品を見てしまうと、作品本来の魅力、レベルの高さが伝わらないため、フィルターを外して見てもらいたい。また、障害は決してハンディではなく個性として尊重してほしい。また、アート展を開催したきっかけは、障害者の方々は多くの人を感動させる力があるが、一つだけないものは自分の作品の魅力を他の人達にプレゼンテーションすることができないため、それを代わりに世の中に伝える仕事をしていて、その一つの手段が作品展の開催だそうだ。それ以外にも、SNSでの発信や企業とのコラボによる商品企画・開発等で理解を広め魅力を伝えている。

(2)取り組みの結果と考察
ア、全国障害者研究会でのボランティア
実際に視覚障害者の方と一緒に階段や教室を歩いたり、車椅子の体験をした。道の細さによって変わる視覚障害者への介助の仕方や急な坂道を車椅子で進むことの怖さなど普段感じることのできない体験をした。介助することは相手の命と暮らしを支え守っていくことなので、大きな責任を抱えなければならないことを交流を通じて学んだ。障害者の介助は、私が障害者をお手伝いしているという以上に私にたくさんの発見をくれた。また、多目的室で障害児の方と過ごしていた際、急に落ち着きがなくなった方がいたが、周りのスタッフや先生が「楽しいんだね！」と声をかけていた。これはその方の特性を理解しないと分からないことであり、交流経験の少ない私は何をすべきか全く分からなかった。改めて交流経験の大切さと私の経験不足を感じた。この大会は263名のボランティアが協力し、大会の参加者は約1300名となった。その中には他県から奈良へボランティアにきている方々もいた。交流を自らしようと足を運んでる人がかなりいて、思っている以上に交流することに対する関心を持っている方が多いと感じた。

イ、にじいろクレヨンへのボランティア
デイサービスでボランティアを行い２時間ほど子供たちと関わった。活動は以下の通りである。

①	16:00～16:30	自由時間、登校	ボードゲームや電子黒板で遊ぶ
②	16:30～17:00	算数(cm)	15cmものさしを使用し30cm、50cmをおもちゃを並べて作る。メジャーで先生が確認。
③	17:00～17:03	瞑想	ココアの匂いを嗅ぎながら深呼吸
④	17:03～17:30	ボタン作り	最初話を聞いて、説明書を見ながら。
⑤	17:30～18:00	作品発表&いいねカード	頑張ったこと、作品についてなど自分の口から話す。

瞑想の時間で落ち着けない子どもは背中をさすってもらっていた。ココアを飲むのではなく匂いを嗅ぐということに衝撃を受けた。作品発表では活動の振り返りを行い、短い文でも自分で考えたことを自分の口で話すことが大切だと感じた。部屋の中の押し入れが勉強スペースになっていて、落ち着くリラックス効果のある青色の壁紙が貼られていた。

ウ、isikawaみらいアート展と第51回奈良県障害者作品展の観覧
言葉はなくても作品を通して伝わってくるものがあり、絵画や書道、彫像、衣服などさまざまなものが飾られていた。音を色で表現した作品や絵などで表現する心のこもった作品があった。中には受賞されている作品もあり、どれも素晴らしい作品ばかりだった。また、言葉はなくても作品一つ一つに個性が感じられた。

4.結論
実際に様々な方と交流をして、多くのことを得た。関わらなければ、知らなかった価値観や知識があり、交流の場を通してそれぞれ違うバックグラウンドをもった方々が関わりを持っていて、自ら交流の場に足を運ぶことの大切さを感じた。これらのことから、交流の場を増やしていく活動が必要だと考え、方法について話し合ったが、自ら交流の場をつくることはできなかった。交流の場を作る上で費用や人手、時間など様々な壁があり、交流する機会を子供の頃から全ての人に与えるのは、かなり大変だ。そして自分たちから情報を発信することと高い目標をたてたため解決策を見出すのが難しかった。しかし、この交流を増やすことで差別や壁を減らすことはできるだろう。自らそのような場を探せば交流することはできるため、そのような場があることを広めていくことも重要だ。

5.おわりに
探究していく中で沢山の人と関わって交流し、多くの学びを得た。また、様々な壁にぶつかり、正解がないことの難しさをかなり感じた。しかし、実際に交流の場に足を運んだりイベントに参加するなど多くの貴重な経験を通して、自分には気づけない発見ができ、多くの学びを得ることができた。私はこの発見が、人と人との未来を明るくし深い関係を築いていく鍵となることを学んだ。自分が考えていたことや価値観はかなり未熟で、まだまだ知らないことが多く、良い手助けだと思ってしたことが当事者の立場からすると良いものではなかったり、実際に言われないと気づかないこともあった。今後、知らず知らずのうちに持ってしまっている偏見に自分自身で気づき、その考えは本当に正しいのかと自分を見つめ直すことも大切にしていきたい。

6.参考文献・出典
一般社団法人障がい者自立支援サポート　Dream News 企業PRのポータルサイト　2023年2月6日
https://www.dreamnews.jp/press/0000273993/
WHILL株式会社　お役立ちコラム　2019年3月7日
https://whill.inc/jp/column/16_shougai
インクルーシブ教育とは？日本の現状と課題を実践例を交えて　2024年5月7日
https://mannen.jp/patchtheworld/5376/
【傾聴記】「障害」か「障がい」か　2015年6月18日
//www.nishinippon.co.jp/sp/item/n/176340/#:~:text=%E5%86%85%E9%96%A3%E5%BA%9C%E3%81%AB%E3%82https%88%E3%82%8B%E3%81%A8%E3%80%81%EF%BC%92%EF%BC%90%EF%BC%91%EF%BC%94,%E7%86%8A%E6%9C%AC%E3%81%AE%E4%B8%A1%E6%94%BF%E4%BB%A4%E5%B8%82%E3%80%
Re学院中等部高等部　2024年10月14日
https://re-gakuin.com/2024/10/14/blog20241014/
八重山毎日新聞　2024年10月25日
https://www.y-mainichi.co.jp/news/40993
DINF 障害保健福祉研究情報システム　国立特殊教育総合研究所　落合　俊郎　1998年3月
https://www.dinf.ne.jp/doc/japanese/prdl/jsrd/rehab/r093/r0930003.html